

①秋の収穫時には、稲の茂みから逃げ場を失って飛び出してくるカエルを食べに、夏鳥のチュウサギがたくさん集まってきました。絶滅したトキと食べ物をとる習性が似ているチュウサギは、日本全国で数が減っているために環境省が「準絶滅危惧」に指定をしている希少種です。「たかしま生きもの田んぼ」でカエルをたくさん食べて体力をつけてから、チュウサギは南国への秋の渡りに旅立ちます。農家の営みと、渡り鳥の命が見事な調和を表しているのです。



⑬田植え前の春と、稲刈り後の秋にやってくる「旅鳥」という渡り鳥もいます。代表的な旅鳥が写真のチュウシャクシギで、田んぼで餌の生きものを捕らえます。「たかしま生きもの田んぼ」は、世界を旅する野鳥たちの命の糧になっているのです。



冬には、オオハクチョウもやってきます

⑫冬になると、北国から白鳥などさまざまな冬鳥がやってきます。写真は手前がオオハクチョウで奥がコハクチョウ。昨年の冬は滋賀県に800羽あまりのコハクチョウと5羽のオオハクチョウが渡ってきましたが、そのうちオオハクチョウは5羽すべてがそろって「たかしま生きもの田んぼ」にやってきて落ち穂を食べていました。



⑧中干しの時に水生昆虫の幼虫やカエルのオタマジャクシが避難できるように、田んぼの畦に沿って溝を掘った農家もいます。こうすることで、たくさんの生きものが親にまで育つことができます。



⑦排水路を堰上げして田んぼに魚を登らせる方式の魚道に取り組む農家もいます。これは滋賀県がすすめる「魚のゆりかご水田」と同じ方式の魚道です。



⑨左がトノサマガエルで、右がナゴヤダルマガエル。よく似ているので違いを見分けるために農家も勉強します。ナゴヤダルマガエルは「沖縄を除く日本でもっとも絶滅が危惧されているカエル」ですが、高島市の平野部の田んぼでは数多く見られます。



虫やカエル、野鳥もいっぱい
「たかしま生きもの田んぼ」

「環境こだわり」のさらに先ゆく取り組み

「たかしま生きもの田んぼ」では、人には気づきにくい環境の変化にも敏感な生きものたちを対象に、その生息状況を把握する「生きもの調査」が行われています。

この調査は、生きものたちの存在によって環境保全型農業の効果を検証するとともに、より豊かな生物相を育んでいくための方策を考える上でも役立ちます。

「たかしま生きもの田んぼ」で栽培されるお米が、県の環境こだわり農産物よりもさらに厳しく農薬、化学肥料の使用を制限しているのも、生きものが環境の指標になっているからです。農薬や化学肥料の使用を止めたり抑えたりした田んぼの生物相の豊かさは際立っています。

また、農薬などの削減以外の取り組みとして、冬の水鳥たちの餌場や憩いの場を提供するための冬期湛水、産卵のために田んぼへ遡上する魚たちのための魚道設置や休耕田を使ったビオトープ、牛耕と山焼きによる里山の森林環境の再生など、田んぼやその周辺の生物相に応じた生物多様性の保全策も行っています。

ちよつと昔までは全国どこにでも見られた「田んぼの生きものたち」の多くが、今も顔ぶれ豊かに暮らす田んぼ。その誇りを冠した「たかしま生きもの田んぼ」プロジェクト。消費者と、農家と、生きものたちが、それぞれの「安心」を共有していけるような未来を創るため、これから新たな発見と挑戦の日々が続きます。

図農業振興課 ☎(25)8511

(写真提供・制作協力 アミタ持続可能経済研究所)

⑩無農薬の田んぼの水面にびっしりと浮かぶウキクサ。太陽の光をさえぎることで、コナギなど稲の育成を妨げる雑草が生えてくるのを防いでくれます。このような田んぼを育てることで、除草剤を使わずにすむのです。こうして生産された「たかしま生きもの田んぼ米」は、今、都市部の消費者の間にも静かに人気を上げつつあります。

